

フランス語における歴史的未來と ベンヤミン弁証法

髭 郁彦

1. はじめに

この論文ではフランス語の歴史的未來 (futur historique)、つまりは、過去の出來事に対して、多くの場合、歴史的現在 (présent historique) と共に用いられる歴史敘述スタイルに關しての考察を行う。このスタイルは形態論的には單純未來 (futur simple) が使われるが、後続するセクションで詳しく論述するように、統辭形態論的な單純未來の用法研究の論文の数は非常に多い。だが、こうした研究において歴史的未來は、作者が過去に身を置きながら敘述するという指摘が行われる程度で⁽¹⁾、何故歴史的未來が歴史記述のテキストにおいて使用されることができののかという点に対しての研究はまったくなされていない。いくら單純未來の用法を積み上げていっても、テキストという概念や歴史書というジャンルの中のスタイルといった問題を取り扱うときに、どうしても考察しなければならない事象の探究が不可能であることは明らかである。この問題を究明するためには用法研究の成果を踏まえつつも、用法研究のための分析装置以外の分析装置を導入しなければならない。その中心的な装置として考えられるものがベンヤミン (W. Benjamin : 1892-1940)⁽²⁾ の提唱している彼独自の弁証法である。

2. ベンヤミン弁証法とは？

ベンヤミンは『歴史哲学のテーゼ』の中で、「フランス革命はローマの自覺的な回歸だった。それは古代ローマを引用した — ちょうど、流行が過去の衣裳を引用するように。流行は、アクチュアルなものへの嗅覺をもっている。たとえアクチュアルなものが、ムカシというジャンルのなかの、どこをうろついていよう

とも。流行は、過去への、狙いをさだめた跳躍なのだ。ただしこの跳躍は、支配階級の統制下にある競技場でなされている。同じ跳躍が、歴史の自由な空のしたでなされるならば、それは弁証法的な跳躍であり、マルクスが理解した意味での革命にほかならない」⁽³⁾と書いているが、ここで示されている跳躍方法がベンヤミン弁証法である。

つまり、それは今村仁司が『ベンヤミン「歴史哲学のテーゼ」精読』の中でベンヤミンの語っている文化史的弁証法の二分割法に関して、「(…) ふつうの二分法は、積極と消極を区分し、そうしてえられた消極部分は積極部分を明白に浮かび上がらせるために利用するにすぎない。主役の積極部分に脚光をあびせた後では、消極部分の役割は終わり、排除される。これにたいしてベンヤミンは、むしろ消極部分をこそ重視し、消極部分の二分法を提案しているのである。それは最初の二分法を拒否するものではないから、消極部分を舞台にした二分法の二分法になる」⁽⁴⁾と述べ、さらに、「最初の二分法によって生まれた消極部分をさらに二分し、この操作を際限なく続ける。消極部分を二分するなら、消極部分のなかに積極部分が現われ、それが保存される。さらにその二分によって生じた消極部分を二分すると、べつの積極と消極が生まれ、こんどもまた積極を保存しつつ、消極部分を二分していく。以下同じ。この操作のなかで、つぎつぎと新しい積極要素が見つけたされ、そして保存されていくが、同時に新たな消極的な部分が生じて、そこから新たな積極部分がみつけたされる。してみれば、積極的なものは消極的なものから生まれことになる。この積極的なものは、この操作が開始した最初の「積極的で肯定的なもの」とはまるで違うものである。消極部分のなかからみつけたされる数々の「積極部分」は、普通の経験では見ることはできなかった何ものであるとあって、これらの積極部分はひとつの集合ないしシリーズを構成する」⁽⁵⁾と述べている歴史考察過程における体系構築手続きのことである。

一般的な弁証法が積極的要素つまりは概念や事象のプラス面を発展させるために用いられるものであるのに対して、ベンヤミン弁証法は概念や事象の消極要素つまりはマイナス面に焦点を当てていくだけではなく、一般的弁証法が未来投企を大きな特徴とするのに対して、過去の歴史の激流に押し流されてしまい、忘却され、見捨てられた部分に焦点を当てるという特徴を持っている。この弁証法実

現装置としてベンヤミンはアレゴリー (Allegorie) の重要性を挙げているが、こうした装置はアレゴリーだけではなく、フランス語においては歴史的未來を表す単純未來を用いたテキスト構築 (可能世界を導入する単純未來形) にもあると思われるのである。それゆえ、ここではこの注目すべき問題を詳しく検討していこうと思う。

3. 単純未來の用法について

フランス語の単純未來形の用法研究はマングノー (D. Maingueneau) やトゥラティエ (C. Touratier) といったフランスの言語学者による探究があるだけでなく、日本でも青木三郎や渡邊淳也などの探究があり、この問題に対するかなり多くの研究書や論文があるが、ここでは、単純未來の用法がコンパクトに上手くまとめられている青木の「現代フランス語の単純未來形の「多様性」について」という論文の中に書かれている用法研究を紹介するだけに止める。

青木は単純未來の用法を時間的用法と主観相の強いモデル的用法の二つに分け、前者をさらに予定・予告、予言、天気予報、夢想、確信、法的未來、格言的未來の七つに、後者をさらに予想判断、決断・約束、命令、願望・意志・意図、断言の緩和の五つに分けている。これらの区分への批判的検討はこの論文における研究課題以外の煩雑な考察を導入しなければならないゆえにここでは行わず、前者の用法と後者の用法から例文を三つずつ挙げておくのみとする (例文と訳は青木の論文からの引用である)。

(A) 時間的用法

- (1) *Le vol 365 vous fera arriver à Tokyo à 13 heures 15 à Narita.* (365 便は 13 時 15 分に成田に到着します) [予定・予告：以下 [] 内は用法を示す]
- (2) *Petit Ours Brun tourne autour de la galette et il répète : --Moi, je serai le roi...!* (茶色の小熊ちゃんは、ガレットのまわりをぐるりと回って、繰り返して言うのでした。「僕が王様だよ。」) [確信]
- (3) *Rira bien qui rira le dernier.* (最後に笑う者が一番よく笑う。) [格言的未來]

(B) モデル的用法

- (1) *Ne t'inquiète pas ; je ne le dirai à personne.* (心配するな。誰にも言わないから。)[決断・約束]
- (2) *Le Bouillon, c'est notre surveillant, et un jour je vous raconterai pourquoi on l'appelle comme ça.* (ブイヨンは、僕たちの当直の名前なんだ。どうしてそんなあだながついたか、いつかお話ししてあげましょう。)[願望・意志・意図]
- (3) *Je vous avouerai que je ne suis pas tout à fait d'accord avec cette idée.* (正直なところ、その考えには諸手を挙げて賛成というわけではありません。)[断言の緩和]

こうした用法研究はラングのシステムの構造を明確化するために有効なものではあるが、歴史的未來というスタイルを解明するために十分なものとは言い難い。つまり、スタイル構築のための基盤となるラングの範疇内での研究としては不可欠なものであるが、言表連鎖によって構築されるスタイルの考察には適さない。用法をいくら類型化しても、あるテキストでは過去形の記述によって歴史が語られているのに対して、他のあるテキストでは歴史的未來の叙述が何故行われているかという理由がまったく理解できないからである。

4. 『パリ・コミューン』をコーパスとして

『パリ・コミューン』(原題は、*La Proclamation de la Commune*)の著者のルフェーヴル(H. Lefebvre)は1901年に生まれたフランスの社会学者・思想家で、1991年に死去している。熱烈なマルクス主義者であったが、研究領域は多岐にわたり、都市論の先駆けとしての『都市革命』(*La Révolution urbaine*, 1970, Gallimard)や『空間の生産』(*La Production de l'espace*, 1974, Anthropos)などの興味深い研究書がある他に、地理的な問題を多角的に分析した著作も数多く発表している。代表的な著書は前述したもの以外に、『マルクス主義』(*Le Marxisme*, 1948, «Que sais-je?»)、『構造主義を超えて』(*Au-delà du structuralisme*, 1971, Anthropos)などがある。

『パリ・コミューン』は1965年にガリマール社から出版されたテキストであるが、後に同社から「フランスを作った30日(Trente Journées qui ont fait la France)」

という歴史研究シリーズの一冊として再刊行されている。この研究書では1871年に起きたパリ・コミュン (Commune de Paris) という歴史的大事件が詳細に分析されているが、ルフェーヴルの書いた『パリ・コミュン』をこの論文内で行う考察のためのコーパスとして何故選んだのかという理由をまず示さなければならない。

当然の話ではあるが、歴史記述というジャンルに属するテキストの中に登場する単純未來形でなければ、歴史的未來とはならない。そうしたジャンルのテキスト空間内で用いられなければ、歴史的出来事との関連性が保証されないからである。しかしながら、今の私にはこのジャンルの多くのテキストをコーパスとして収集し、大規模なコーパスを使った分析を行う時間的な余裕がない。それゆえ、特定のテキストに絞って研究課題を探究していく必要がある。ルフェーヴルの書いたこのテキストは上記したように歴史的事件の動きが述べられているが、この本に登場する単純未來形の数は559であり、その中で歴史的未來を示す単純未來形の数は272である。⁽⁶⁾ この数値を見ても、テキスト内で用いられている時制という視点で、単純未來形が大きな役割を担っており、歴史的未來叙述が頻繁に行われていることが理解可能であろう。更に、歴史的事件を取り扱った書物の中で、このテキストのように歴史的未來がこれ程多く登場するテキストは少数であり、この側面からも『パリ・コミュン』という歴史書が本研究にとっての貴重なコーパスとなってくれられると考えられるのである。

しかしながら、もちろんこの短い論文の中でルフェーヴルのテキスト内にある単純未來形を用いて叙述が行われているすべての歴史的未來に対して分析を行うことは不可能である。7部構成のこの歴史書において、第1部、第2部、第3部は学術的な考察箇所が多く、さらに、第7部の第3章と4章はこのテキストの結論が示されている箇所であるため、歴史的未來叙述がなされている単純未來形の詳しい分析を行うのに最適な部分ではない。ここではパリ・コミュンという歴史的な出来事が時間軸に沿って綿密に検討されている第4部、第5部、第6部、第7部の第1章と2章を考察対象として、そこで用いられているいくつかの単純未來形をピックアップし、過去の出来事を未來形によって語るこの意味について研究していく。

5. テキスト内の単純未来形

(1) 歴史的未來を示していない単純未來形

まず指摘しなければならない点は、この本の中で用いられている単純未來形のすべてが歴史的未來を表してはいないという点である。それゆえ、分析手続きとして歴史的未來敘述以外の単純未來を最初に排除しなければならない。こうした除外すべき単純未來形の使用例は大まかに言って以下の二つの場合である。

(a) *Les péripéties de la guerre franco-allemande et du siège de Paris, nous les laisserons de côté.* (普仏戦争とパリ包圍の展開は脇に置いておこう。)

[p.171 : 第 4 部]

(b) *Nous dirons que seul M. Thiers avait ce qu'on appelle en langage moderne une tactique et une stratégie.* (われわれは、ティエール氏だけが現代の言葉で言うところの戦術や戦略というものを持っていたと述べ得るだろう。)

[p.231 : 第 5 部]

最初の文 (a) は論文や小説などでこれから話される事柄を予告するためにしばしば用いられる単純未來形であり、(b) は著者の意見陳述を示している。いずれの場合も文体論的に見れば、パリ・コミューンという歴史的出来事に関するエクリチュールではなく、論理展開のための手続き的な語りとしての側面が強いものである。それゆえ、こうした歴史的未來の敘述と直接係わらない単純未來形は研究対象から除外する必要がある。

(2) 歴史的未來を示す単純未來

では、この研究の主要対象である歴史的未來を表す単純未來形の例をいくつか挙げ、その特徴を考察していこう。

(c) *Les tentatives lyonnaises, en fin septembre 1870, montrent bien le péril de la situation et ses contradictions internes. Toutefois, ces contradictions ne pousseront pas loin leur oeuvre en province. Les ligues, les mouvements séparatistes, les émeutes républicaines, comme en mars les tentatives communalistes, seront facilement matés par le pouvoir.* (1870 年 9 月末のリヨンでの試みは危機的状

況と内部矛盾を十分に示すものである。しかし、こうした矛盾が地方においてその作用を遠くにまで影響を与えることはないであろう。三月のコミューン派の試みと同様に、同盟、分離主義者の運動、共和主義者の暴動は権力によって簡単に打ち破られるであろう。)[p.174、第4部]

- (d) *Quant au général Lecomte, il doit (...) gravir la Butte Montmartre par la rue du Mont-Cenis. En réserve, boulevard Rochechouart, il conservera, selon l'ordre de marche, le 18e bataillon de chasseurs à pied, une batterie d'artillerie, le 3e bataillon du 88e de marche devant occuper l'est de la butte.* (ルコント将軍について言うならば、将軍は(…)モン＝スニを通り、ビュット・モンマルトルを登っていく必要がある。命令に従い、ロシュシュアル大通りに予備軍として、丘の東側を占領すべく、狩猟歩兵第18大隊、砲兵一中隊、第88歩兵部隊第3大隊を温存するであろう。)[p.237、第5部]

歴史的現在が使われた後に、単純未來形が連続的に使われている歴史的未來であるこの二つの典型的な例文の中では、過去のある時点における可能性の提示が行われていると述べ得るだろう。もちろん、(c)や(d)が過去形や現在形を使って書くことも可能である。しかし、もしも(c)や(d)が過去形で書かれていたならば、ここに書かれている事件はすでに決定されたもので、それに対する見解や感情は様々なものであるとしても、結局は起こってしまった事実が列挙されているに過ぎなくなってしまう。また、この二つの例文が現在形のみで書かれていたとするならば、ある行為を遂行したことについての記述は示されているが、それがどういった方向性に進んで行くのかということが明確ではなくなる。ところが、この二つの例文のように歴史的現在から歴史的未來へと続く叙述を行うことで、未來のある方向性へと向かう出来事の展開がはっきりと見えてくる。

- (e) *On ne l'écoute pas. N'a-t-on pas déjà décidé cette mesure politique imprudente, prématurée, mais indispensable le premier jour de la liberté : la levée de l'état de siège? On rédige et on signe l'affiche qui (troisième de la journée) annonce la date et les modalités des élections au conseil communal. Elles auront lieu le mercredi 22 mars, au scrutin de liste par arrondissement.* (人々はそれを聞こうとしない。自由を得た最初の日、時期尚早だが止もう得ない戒嚴令の解除

というこの重要な政治的措置がすでに決定されていたのではなかったか。コミューンの議会選挙の日とその様式を告知する（その日の三番目の）ビラが起草され、署名される。選挙は三月二十二日水曜日に、区ごとに連記投票によって行われるであろう。）[p.292、第6部]

歴史的現在や歴史的未來を用いて書かれたテキストにも、もちろん、(e) のように過去形も登場する。ここでは複合過去 (passé composé) しか現れてはいないが、単純過去 (passé simple) の使用も可能である。何故なら、過去のどの時点を現在時と見なして叙述を行うかは書き手の選択によって決定され、設定された現在から見て過去である事象に対しては過去形を用いて語ることが可能だからである。だがもちろんこの場合にも上述した過去における開かれた未来という問題は存在している。ここではこれ以上詳しい分析はできないが、このテキストの第4部、第5部、第6部、第7部の第1章と2章では、こうした過去における未来の可能性へと開かれている出来事が問題となっており、そのために単純未来形が多数用いられていると考えられる。この開かれた未来はフッサール (E. Husserl : 1859-1938) の開在性 (Offenheit) ⁽⁷⁾ という概念と深く関係するものであるが、より詳細な検討はセクション6で行う。

(3) 歴史テキストにおける単純未来と近接未来

歴史的未來を示すテキストにおける未来形としては単純未来が主要なものであるが、近接未来 (future proche) が用いられる場合もある。歴史的未來の明確な考察を行うために前者が使われる場合と後者が使われる場合の差異についても考察する必要がある。次の例文をまず読んでもらいたい。

(f) *Il (=Paris) aspire à la fête. C'est un frémissement qui parcourt la ville. Bientôt, devant les barricades qui entourent l'hôtel de ville, autour des 20000 fédérés qui campent avec leurs canons et leurs mitrailleuses sur la place, parmi les retranchements de Montmartre et de Belleville, les groupes vont se former.* (パリは祝祭を渴望する。それは街を駆け抜けるざわめきとなる。間もなく、市庁舎を取り巻くバリケードの前に、大砲と重機関銃と共にその場に野営している二万人のコミューン兵士の周りに、モンマルトルとベルヴィルの防

衛陣地の間に、集団が作られ始めるであろう。)[p.290、第6部]

この部分では近接未來が使われているが、ここで問題となっている時間性は近い未來に連続的に起きる事柄である。もしもここで単純未來形が用いられていたならば、未來の緊急性を帯びた出来事の特徴が曖昧になる。また、ここでは未來の可能性を様々に持った時間性よりも時間的流れの中で起きる出来事の進行が問題となっている。そのためにこの箇所では近接未來が用いられていると考えられる。未來の開在性に視点の中心が置かれている場合に用いられる単純未來形よりも、連続する時間性が問題となっていると考えられるのである。それゆえ、近接未來は歴史的な開在性として未來を示すダイナミズムを有する叙述法ではないと述べ得るのである。

6. 過去における未來という概念

(1) バンヴェニストの提唱した語りの問題と歴史的未來

バンヴェニスト (E. Benveniste : 1902-1976) はフランス語の動詞の時制はそれぞれの動詞ごとに相補的で異なった二つの体系に区分されており、その一つが「言説 (discours)」のレベルのもので、他の一つが「歴史 (histoire)」のレベルのものであると主張している。⁽⁸⁾ 前者の語りは話し手と聞き手という対話者間の関係性を想定している。しかも話し手は何らかの方法で聞き手に影響を与えようとするあらゆる言表行為の担い手として理解される。それに対して、後者は歴史 (物語) の中に話し手が全く介入することなく、ある時点に生じた事実を提示する語りである。「歴史」の中心的時制としては単純過去形、半過去形、条件法の各時制形といった時制が挙げられ、「言説」においては現在形、複合過去形、単純未來形などが挙げられる。そして、この二つの語りの選択は話し手の選択の自由に任せられているとバンヴェニストは述べている。つまり、この二つのレベルの語りの選択は言語システムであるラングの問題と言語活動であるランゲージュの問題が交叉する地点に現れる重層的問題であるのだ。バンヴェニストのこの考えを基に、その後、フランス語における継続相のない過去形における「歴史」と「言説」という異なる語りのタイプとしての単純過去形と複合過去形の差異に対する多くの

興味深い研究が行われていった。しかしながら、この関係は単純過去と複合過去といった並列関係にある語りの比較という点だけに焦点が当てられ、「言説」を示す単純未来と「歴史」を示す単純過去形との文体論的な関係性は何かという問題は探究されなかった。だが、歴史的未來叙述を考察する場合には、まさにこの二つの時制の選択が問題となっているのだ。

エクリチュールのレベルで重要なことは単純過去で書くことができるものを単純未来形で何故書くのかという問題である。書き手は自らのスタイルを自由に選択できるという説明だけでは説明原理としてあまりにも貧弱なものである。では如何なる説明が可能であろうか。ここで注目すべき事柄は飛躍という概念装置である。単純過去から複合過去への移行は並行関係にある時制の語りのチェンジのみであり、一つしか飛躍性がないのに対して、単純過去で書かずに単純未来で書いた場合、そこには語りのチェンジだけではなく、時制のチェンジも起き（つまりは、二重のチェンジが起き）、その変化の大きさはまさに飛躍的である。そこにはベンヤミンの語っている弁証法と過去の救済という問題の形象化が行われていると考えることができるのではないだろうか。

(2) ベンヤミンの歴史認識

ベンヤミンは『パサーージュ論』第3巻の中で、「過去がその光を現在に投射するのでも、また現在が過去にその光を投げかけるのでもない。そうではなく形象の中でこそ、かつてあったもの [das Gewesene] はこの今 [das Jetzt] と閃光のごとく一瞬に出会い、一つの状況を作り上げるのである。言い換えれば、形象は静止状態の弁証法である。何故ならば、現在が過去に持つ関係は、純粹に時間的・連続的なものであるが、かつてあったもの [das Gewesene] がこの今 [das Jetzt] に対して持つ関係は弁証法的だからである。つまり、進行的なものではなく、形象であり、飛躍である」⁽⁹⁾と述べているが、それは時間が均質的なものとして連続していくという考え方への批判であり、また、過去を如何に救済するかという問題へと繋がるものでもある。ベンヤミンは『歴史哲学のテーゼ』の中で「一般史は理論的武装ではない。一般史のやりくちは加法的であって、均質で空虚な時間をみたすために、大量の事実を召集する。これにたいして、唯物論的歴史叙述の根

底にあるのは構成の原理だ。考えるということは、思考の運動のみならず、思考の停止をもふくむ。緊張の極の局面においてふいに思考がたちどまるとき、そこにショックが生まれ、それが思考をモノドとして結晶させる」⁽¹⁰⁾と語っているが、この静止した思考が星座 (Konstellation) であり、弁証法によってアウフヘーベン (Aufheben) したビルト (Bild: フランス語の image) であるのだ。すなわち、ある形が浮かび上がることによって、過去は新たな展開に向けて輝き出すのだ。

ここで注記しなければならないことがある。それは以下のようなことである。ベンヤミンの弁証法が前述したように、過去への歴史的アプローチであると共に、進歩の概念に支えられ、それを無批判に受け入れている一般的な弁証法への批判としても作動している点である。アドルノ (T. Adorno: 1903-1969) は『否定弁証法』の中で、一般的な弁証法においてはアウフヘーベンするために否定項として持ち出されるマイナス項 (アンチ・テーゼ [Antithese]) が全面的に排除され、抑圧されることの問題点を説いているが (それが啓蒙主義に支えられた西洋中心主義の根底にあるとアドルノは主張しているが、この点に関してはあまりに哲学的な問題を内包しているゆえにここではこれ以上言及しない)、ベンヤミン思想においても進歩という名の下にマイナス要因とされる事象がすべて切り捨てられることに対する痛烈な批判があったことを忘れてはならない。

いずれにせよ、こうしたベンヤミンの考え方は均質的な時間性の連続によって過去を描写するのではなく、過去を跳躍させ、新たな時間関係を構築することが新たな世界をも開いていくことを強調している。ベンヤミンの提唱している弁証法によってアウフヘーベンされた一つの形象、それがフランス語の単純未來形の中に表象されており、それこそが歴史的未來叙述の選択というエクリチュールを支えるものとなっている。この点には極めて大きな意味がある。単純未來形の使用による可能世界の導入はアレゴリーの一つであり、それは開在性のマークとも言い得るものである。

また、こうした考えはヴァルデンフェルス (B. Waldenfels) がメルロ＝ポンティ (M. Merleau-Ponty : 1908-1961) の知覚研究に対して述べた「(…) 根源的知覚においては、世界はつねに未完であり、決して完全には規定されておらず、つねに開かれた地平をそなえており、獲得された意味の斑晶が混入している (…)」⁽¹¹⁾と

いう指摘にも通じるものがある。未完成であるのは空間的な知覚対象である今ここに
ある世界だけではなく、過去の世界に対してもそうなのであり、それこそが
フッサールが語っている開在性へと繋がるものである。エクリチュールによる創
造においては、すでに決定されたと思われる過去のある世界に対する見方を
打破することが問題となるのだ。

(3) 構造と出来事

山口昌男 (1931-2013) は『文化と両義性』の中でリクール (P. Ricoeur : 1913-
2005) の考えを引用しながら、言語における構造と出来事との関連性について、
「構造と出来事は基本的に相容れないものを持っている。構造は通時(パラダイム)
的であり、出来事は共時(シンタグム) 的である」⁽¹²⁾と書いている。構造は交
換可能な記号体系を形成しているものであり、言表行為の基盤となるものを提供
するものである。それに対して、出来事は言語記号を用いて実際に語る行為を表
し、主観性の、さらには、関主観性の印が刻まれたものである。この構造と出来
事の繋がりとは語 (mot) という仲介者 (médiation) によって実践的なものとなると山
口はリクールの考えに基づきながら説明している。リクールは「(…) 語はシス
テムと行為との間の、構造と出来事との間の交換装置のようなものなのである。
すなわち、一方で、それは差異的な価値として構造に依拠して、その場合、語は
意味論的な潜在的な性質のものにしか過ぎない。他方で、意味論的現実性が言表
の消え行く現実性と同時的であるという点で、語は行為と出来事に依拠している
のだ」⁽¹³⁾と語っている。つまりは、ラングとパロールが交叉する場所で形象化
するものが語なのである。

このリクールの発言をベンヤミン弁証法と関連づけることは十分に可能であ
る。「ディスクールの事例の中でシステムによって出来事を示しながら、語はパ
ロールの行為に構造をもたらし。出来事からシステムに戻りながら、語はシステ
ムに偶然性と不均衡をもたらし。そうでなければ、語は変化も、持続もできなかつ
たであろう。要するに、語はそれ自身では時間の外にある構造に「伝統」を付与
するのである」⁽¹⁴⁾というリクールの言葉は、言表行為による弁証法的発展が構
造から出来事への移行であることを明確に示していると考えられるからである。

それは実践 (pratique) として捉えられた歴史的な動きと見なし得るものなのである。

ここで歴史的未來の問題に戻ろう。もしも過去に起きた出来事が過去時制によってしか表せないものであるならば、過去の出来事は決定された不変のものとして表されるだけであり、過去の開在性は時間の連続性の下に圧殺されてしまうだろう。過去も未來時制によって表わされることによって（フランス語の歴史的未來叙述においては單純未來形によって表し得ることによって）、過去の出来事が歴史の中で開かれたものとして提示されることが可能となるのだ。それこそがベンヤミンの言う、過去時制の持つ決定論的な暴力性からの過去の救済ということではないだろうか。そこには、「空間的にも、時間的にもお互いに隔たったお互いに何も知らない二つの言表が、意味的に対比されることによって（テーマや視点が共通するだけかもしれないが）、何か少しでも何らかの意味的な収斂があるときに、その二つの言表には意味の形態としての対話関係が現われるのである」⁽¹⁵⁾と述べ、過去のテキストとの対話の可能性を指摘したバフチン (M. Bakhtine : 1895-1975) の理論に通じる主張がある。

しかし、忘れてはならないことは、過去の出来事が文体的にも基本的にはすでに定まったものとして表現されるという点である。生活世界 (Lebenswelt)⁽¹⁶⁾ は過去を過去として、決定されたものとして一旦閉じることによって、初めて新たな開在性への飛躍が可能なものとなるのだ。もしも過去の事象すべてが開かれたままであるならば、その煌めきの強大さによって過去はわれわれに見えないものになってしまう。そこにはメルロ＝ポンティが『知覚の現象学』の中で知覚について述べた図 (figure) と地 (fond) との関係と同様の問題が存在している。地としての過去が未來に移し変えられ、表現されるようになるゆえに図としての出来事が地の上で精彩を放ち、浮き上り、光り始めるのだ。

ここでこの問題と深く係わるベンヤミン理論を基盤として提唱されたディディ＝ユベルマン (G. Didi-Huberman) のアナクロニズムという概念についても一言触れておくべきであろう。彼は『時間の前で』の中で、「アナクロニズムはアンチ・テーゼの契機であり、**弁証法の主動力**である」⁽¹⁷⁾と主張しているが、ここで語られているアナクロニズムは「時代錯誤」という意味ではまったくない。「一方で、

アナクロニズムは虚構のマークそのものとして現れ、そのマークは時間的秩序における可能なあらゆる不一致に力を与える。この意味でアナクロニズムは歴史の反対物、**歴史を開かずもの**と見做し得るであろう。しかし他方で、アナクロニズムは歴史を開くものとして合法的に、すなわち、歴史的・時間モデルの有益な複雑体として現れることができるのである」⁽¹⁸⁾とディディ＝ユベルマンが語っているように、それはアナクロニズムによって、より正確に言えば、弁証法的アナクロニズム⁽¹⁹⁾によって、過去—現在—未来というように直線的に並べられた時間軸が大きく変動し、歴史が他の方向に開かれていき、過去のものとして凝固してしまった出来事の 아우라 が再び輝くという意味でのアナクロニズムなのである。この 아우라 の再生にはベンヤミンの語っているビルトが中心的な働きをするが、フランス語の歴史的・未来叙述においては単純未来形が根本的な役割の一つを担っているように考えられるのである。すなわち、弁証法的アナクロニズム実現のための文体論的装置として単純未来形を見つめたとき、それは凝固してしまった過去の出来事に 아우라 の光を再び灯すビルトとなるのである。

7. おわりに

この論文を終える前に、ここまでの探究ではあまり触れられなかった三つの問題を手短かに考察してみたい。一つ目は単純未来と近接未来の形態的な違いという点であり、もう一つはルフェーヴルのテキストにおける歴史的・未来叙述の選択という点であり、三つ目はベンヤミンが語っているビルトと時間との関係性という点である。

最初の問題は、客観相が強い近接未来が *aller* の活用形と動詞の原形という複合形を用いて一つの時制を表すのに対して、主観相が強い単純未来は動詞の原形と未来時制という形態がアマルガム (*amalgame*) された形で表わされるという興味深い点である。過去時制においてはこれとは逆に客観相が強い時制である半過去や単純過去がアマルガムされた形で示され、主観相が強い複合過去が *avoir* の活用と過去分詞という複合形を用いて示されるからである。この問題もベンヤミン弁証法と関係すると思われる。すなわち、過去時制と未来時制の形態論的逆転

現象はまさにベンヤミンの言う形象としての弁証法的な飛躍と考えるからである。この問題はあまりにも複雑であるゆえにこれ以上ここで触れることはできないが、ベンヤミン弁証法におけるビルトの根本性がこの側面からも了解できると思われる。

第二の問題に移ろう。ルフェーヴルは『パリ・コミュン』において単純未來だけでなく、単純過去や複合過去も使いながら、歴史的出来事の描写を行っている。そこには先ほど指摘した文体論的效果の問題が存在している。文体的選択が可能であるということは、それによって歴史的出来事をどのように輝かせるかという側面に関連している。ある事象を単純過去形で書いた場合、そこには示された事象の客観的色彩が色濃く映し出されるが、それとは逆に、複合過去を用いて書いた場合は語り手の主観相が反映する。しかしどちらも、過去が過去として語られており、現在との、あるいは、未來との距離はあまりに大きい。しかしながら、歴史的現在としての現在形や歴史的未來としての単純未來形による語りは過去と現在、過去と未來が弁証法的アナクロニズムによって融合する。こうした様々な語りの形態を駆使することで一つの歴史的出来事を様々な角度から表現するエクリチュールが可能なものとなっているのではないだろうか。

第三の問題を検討することにしよう。ディディ＝ユベルマンは上記した本の冒頭で、「われわれがイメージの前にいるときは、われわれは常に何らかの時間の前にいる」⁽²⁰⁾と述べているが、「イメージ」と「時間」という語を逆転させることも可能である。つまり、「われわれが時間の前にいるとき、われわれは常に何らかのイメージの前にいる」と語ることができるのである。生活世界の中に存在しているわれわれはその空間内で何らかの実践を行っているが、それは単にある時間内である行動をなすということではない。ある時間を過ごすということは、自らの前に現前する実際の、あるいは、想起的な何らかのイメージと向き合うことである。そこにはイメージが（ベンヤミンの用語で言うならばビルトが）常に存在しているのである。この論文ではフランス語において過去の何らかの出来事について語る場合に思い浮かべられるビルトとしての単純未來形について考察していったが、このビルトは過去そのものではなく、現在や未來の時間性も帯びたビルトであることも注記すべきであろう。時間的な超越性の内包は前述したよう

に弁証法的アナクロニズムのダイナミズムによって作動するものである。

ベンヤミン弁証法は、もちろん、言語記号のみに適応可能なものではなく、絵画、音楽、映画、演劇、バレエなど他の多くの記号体系の中での創造行為によって構築された作品全体に対して用いられることが可能な装置である。すなわち、時間的な跳躍性にだけ関係する概念なのではなく、空間的な跳躍性とも関連する概念である。ベンヤミンの用語に従えば、空間的には星座を構成するために用いられる装置と述べることができ、また、時間的には弁証法的アナクロニズムとして作動する装置であると述べ得る。時間的にせよ、空間的にせよ、特定の時空間に縛られない弁証法的な飛躍性はテキスト世界の新たな地平を切り開くためのダイナミズムなのである。

ここでは言語記号内の跳躍的装置としてフランス語における歴史的未來を取り上げたが、もちろんこの装置はフランス語の歴史的未來に用いられる単純未來形のビルトだけに還元できるものではない。前述したように様々なアレゴリー表現の中にも見出されるものである。だが問題はある文法的形態が単に文法的な機能を担うだけのものではなく、ある比喩が単にデノテーションの他にコノテーションも持つというだけのものではなく、ディスクール展開の中で弁証法的な働きを担うということである。それはテキスト空間を輝かせる強力なアウラとなり得るのである。この点を強調して、この論文を終えたい。

注

- (1) たとえば、朝倉季男、『フランス文法事典』、1955、白水社、p.164を参照。
- (2) 本文中で言及した著者について、既に死去している著者に関しては生没年を明記している。
- (3) 「歴史哲学のテーゼ」 in 『ヴァルター・ベンヤミン著作集第1巻：暴力批判論』、1969、晶文社、野村修他訳、p.125。
- (4) 今村仁司、『ベンヤミン「歴史哲学のテーゼ」精読』、2000、岩波書店（岩波現代文庫）、p.18。
- (5) *ibid.*, p.19。
- (6) 小川紋奈、「歴史テキストにおけるフランス語の単純未來形の機能に関する研究－La Proclamation de la Commune をコーパスとして－」 in 『筑波大学フランス語フランス

文学論集』第31号、2016、p.28。

- (7) フッサールのこの概念は主体の世界内での自己投企の可能性を示すものとして捉えることが可能である。
- (8) この箇所では提示している問題は、参考文献に挙げたバンヴェニストの二冊の著作の中で詳しく論じられている。
- (9) ヴァルター・ベンヤミン、『パサージュ論第3巻』、2003、岩波書店(岩波現代文庫)、今村仁司他訳、p.184。
- (10) ヴァルター・ベンヤミン、『暴力批判論』in『ヴァルター・ベンヤミン著作集第1巻：暴力批判論』、1969、晶文社、野村修他訳、p.127。
- (11) ベルンハルト・ヴァルデンフェルス、『フランスの現象学』、2008、法政大学出版、佐藤真理人監訳、p.175。
- (12) 山口昌男、『文化と両義性』、2000、岩波書店(岩波現代文庫)、p.59。
- (13) et (14). Paul Ricoeur, *Le conflit des interprétations*, 1969, Seuil, p.95.
- (15) Mikhaïl Bakhtine, *Esthétique de la création verbale*, tr. fr. par Alfreda Aucouturier, 1984, Gallimard, p.334.
- (16) この概念語はフッサールが提唱したもので、主体が実際に知覚し、何らかの行為を行っている空間を、つまりは、われわれ存在者の生の実践の場を示す。
- (17) Georges Didi-Huberman: *Devant le temps : histoire de l'art et l'anachronisme des images*, 2000, Minuit, p.185.
- (18) *ibid.*, p.38.
- (19) この概念に関する考察、特に絵画との関係における考察については、参考文献の中に挙げている「弁証法のアナクロニズムと絵画」で詳しく論じられている。
- (20) Georges Didi-Huberman, *Devant le temps : histoire de l'art et l'anachronisme des images*, 2000, Minuit, p.9.

参考文献

- 青木三郎、「現代フランス語の単純未來形の「多様性」について」、in『文藝言語研究言語編』第34号、1998、筑波大学、pp.115-133。
- 朝倉季男、『フランス文法事典』、1955、白水社。
- アドルノ(テオドール)、『否定弁証法』、1996、作品社、三島憲一他訳。
- 今村仁司、『ベンヤミン「歴史哲学のテーゼ」精読』、2000、岩波書店(岩波現代文庫)。
- ヴァルデンフェルス(ベルンハルト)、『フランスの現象学』、2008、法政大学出版、佐藤真理人監訳。
- 宇波彰、『ラカンの思考』、2017、作品社。
- 小川紋奈、「歴史テクストにおけるフランス語の単純未來形の機能に関する研究－La Proclamation de la Commune をコーパスとして－」in『筑波大学フランス語フランス文学論集』第31号、2016、筑波大学フランス語・フランス文学研究会、pp.25-79。
- コジェーヴ(アレクサンドル)、『ヘーゲル読解入門―「精神現象学」を読む』、1987、国文社、

- 上妻精、今野雅方訳、
 ディディ＝ユベルマン (ジョルジュ)、『時間の前で：美術史とイメージのアナクロニズム』、2012、法政大学出版、小野康男、三小田祥久訳。
 デュフレンヌ (ミケル)、『眼と耳 ― 見えるものと聞こえるものの現象学』、1995、みすず書房、棧優訳。
 滝口清栄、合澤清 (編集)、『ヘーゲル 現代思想の起点』、2008、社会評論社。
 髭郁彦、『対話、ジャンル、スタイル：テキスト空間の広がりについて』 in 『文体論研究』第 47 号、2001、日本文体論学会、pp.94-107。
 髭郁彦、川島浩一郎、渡邊淳也、『フランス語学概論』、2009、駿河台出版社。
 髭郁彦、『意識と無意識の間で ― 語る主体に対する理論的考察 ―』 in 『諸言語における TAME の表現について』、2018、筑波大学 TAME 研究会、pp.43-57。
 髭郁彦、『弁証法的アナクロニズムと絵画』、宇波彰現代哲学研究所ブログ、2019。
 ベンヤミン (ヴァルター)、『ヴァルター・ベンヤミン著作集第 1 巻：暴力批判論』、1969、晶文社、野村修他訳 (『歴史哲学のテーゼ』は野村訳)。
 ベンヤミン (ヴァルター)、『パサーージュ論』第 3 巻、2003、岩波書店 (岩波現代文庫)、今村仁司他訳。
 山口昌男、『文化と両義性』、2000、岩波書店 (岩波現代文庫)。
 ルフェーヴル (アンリ)、『パリ・コンミュン』上下巻、1967-1968、岩波書店、河野健二他訳。
 渡邊淳也、『フランス語の時制とモダリティ』、2014、早美出版。
 Bakhtine, (Mikhaïl) (V. N.Volochinov) : *Le marxisme et la philosophie du langage, essai d'application de la méthode sociologique en linguistique*, tr. fr. par Marina Yagello, 1972, Minuit.
 Bakhtine, (Mikhaïl) : *Esthétique de la création verbale*, tr. fr. par Alfreda Aucoturier 1984, Gallimard.
 Benjamin (Walter) : *Paris, capitale du XIXe siècle : le livre des passages*, tr. fr. par Jean Lacoste, 1997, Cerf.
 Benveniste (Emile) : *Problèmes de linguistique générale 1*, 1966, Gallimard.
 Benveniste (Emile) : *Problèmes de linguistique générale 2*, 1974, Gallimard.
 Cojève (Alexandre) : *Introduction à la lecture de Hegel*, 1947, Gallimard.
 Didi-Huberman (Georges) : *Devant le temps : histoire de l'art et l'anachronisme des images*, 2000, Minuit.
 Ducrot (Oswald) : *Dire et ne pas dire, principes de sémantique linguistique*, 1972, Herman.
 Ducrot (Oswald) et Todorov (Tzvetan) : *Dictionnaire encyclopédique des sciences du langage*, 1972, Seuil.
 François (Frédéric) : *Pratiques de l'oral*, 1993, Nathan.
 François (Frédéric) : *Morale et mise en mots*, 1995, L'Harmattan.
 Grize (Jean-Blaise) : *Logique et langage*, 1990, Ophrys.

- Lefebvre (Henri) : *La Proclamation de la Commune*, 1965, Gallimard.
- Maingueneau (Dominique) : *L'énonciation en linguistique française*, 1999, Hachette.
- Merleau-Ponty (Maurice) : *Phénoménologie de la perception*, 1945, Gallimard.
- Ricoeur (Paul) : *Le conflit des interprétations*, 1969, Seuil.
- Ricoeur (Paul) : *Temps et récit 3, le temps raconté*, 1985, Seuil.
- Ricoeur (Paul) : *Soi-même comme un autre*, 1990, Seuil.
- Todorov (Tzvetan) : *Les genres du discours*, Seuil, 1978.
- Todorov (Tzvetan) : *Mikhaïl Bakhtine : le principe dialogique, suivi de Écrits du cercle de Bakhtine*, 1981, Seuil.
- Touratier (Christian) : *Le système verbal français*, 1996, Colin.